

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和3年度学校評価 結果・学校関係者評価

達成度(評価)

- A: 十分達成できている
- B: おおむね達成できている
- C: やや不十分である
- D: 不十分である

学校名	多久市立東原産舎中央校
1 前年度 評価結果の概要	・児童生徒による授業の評価や学級力アンケート等の取組は進んでいる。この成果が、全国及び佐賀県学習状況調査の結果に数値として表れるよう、引き続き児童生徒の学力向上を図ることを重点目標としていく。
2 学校教育目標	夢に向かって生き生きと輝く児童生徒の育成ー共に伸びゆく中央校をつくらー
3 本年度の重点目標	教師の授業力を向上させることによって、児童生徒の学力向上を図る。

4 重点取組内容・成果指標	中間評価	5 最終評価
---------------	------	--------

(1)共通評価項目			具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	重点取組 取組内容	成果指標 (数値目標)		進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言	
●学力の向上	●全職員による共通理解と共通実践	●学力向上対策シートに示したマイプランの成果指標を達成した教師90%以上	・教職員が定期的にマイプランを意識するとともに、校内研修等により、PDCAサイクルを意識した取組の促進を図る。	A	・達成度は86%である。今後もマイプランを意識した取組の促進を図る。	A	・達成度は92%である。 ・数値目標は達成したが、今後も校内研修等によりPDCAサイクルを意識した職員共通実践の継続が必要である。	A	・今後も計画的なマイプランの遂行が必要だが、感染症の状況を考慮し、学習状況に応じた臨機応変な学力対策に取り組む必要がある。	学習指導部
	○教師の授業力の向上 ○教育情報化とICT利活用	○1単位時間を完結させる授業を実践している ○授業や家庭でPCを活用した学習が楽しいと答える児童・生徒80%以上。	・主体的な学びを促す「あてめ」の設定、それに呼応した「まよめ」、思考を深め、広げる「ふりかえり」を授業に行う。 ・1日の授業の半数以上の授業でPCを活用、週1回以上PCを活用した宿題を提示。	A	・1単位時間を完結させる授業を実践している ・答える教師は90%であり、PCを活用した学習が楽しいと答える児童・生徒は93%である。いずれも数値目標を達成している。	A	・1単位時間を完結させる授業を実践している ・答える教師は96%であり、PCを活用した学習が楽しいと答える児童生徒は96%である。 ・今後も、より効果的なPCの活用に向けて研修を深め必要がある。	A	・学力の基本は文章読解力であり、どの教科の成績にも影響を与える。そのため、児童生徒の「文章を読み、何を聞かれているのかを捉え切る力」をつける取組が必要と考えられる。	
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○自己肯定感を持ち、自分を肯定的に認識していると答える児童・生徒80%以上	・児童生徒の強みを見つける教師の心がけと日常の声掛け。	A	・達成度は81%であり、数値目標を達成しているが、学年が進むにつれ低下する傾向がみられる。今後も児童生徒の強みを見つける教師の心がけと日常の声掛けを続ける。	B	・達成度は78%であり、数値目標を若干下回った。 ・児童生徒の強みを見つける教師の心がけと日常の声掛けの継続が必要である。	B	・今後も義務教育学校の強みの一つとしての「児童生徒を9年間を通して育てる姿勢」の継続が必要と考えられる。	生徒指導部
	●いじめの早期発見、早期対応体制の充実	○いじめ見逃しゼロ ○アンケートがいじめ発見につながったと回答した教員80%以上。	・中央っ子・生活アンケートを毎月行い、いじめ見逃しゼロを目指す。	A	・達成度は96%であり、数値目標を達成している。 ・中央っ子生活アンケートを継続し行い、いじめの早期発見を目指す。	A	・達成度は100%である。 ・いじめの認知数が増えたことで、いじめの早期発見、早期対応体制の充実につながっている。	A	・今後もアンケート(児童生徒・保護者)を活用したいじめの早期発見・早期対応や、日頃の道徳教育、人権・同和教育の充実が必要と考えられる。	
●健康・体づくり	◎夢に向かうために「志」を持ち、夢の実現に向かって自ら進んで努力する児童生徒の育成	○夢を持ち、夢の実現に向け、「具体的目標を決めて努力している」と答える児童・生徒85%以上。	・日々の教育活動に目的意識を持たせ、学ぶ大切さ、楽しさを伝えていく。 ・児童会、生徒会による活動及び児童生徒の交流活動を充実させる。 ・キャリアパスポートの活用	A	・達成度は81%であり、数値目標を達成しているが、学年が進むにつれ低下する傾向がある。日々の教育活動の中で、自分の良さや可能性を見つける機会を増やしていく。	A	・達成度は80%であり、数値目標を下回った。 ・学年が進むにつれ低下する傾向がより顕著となった。 ・今後は、キャリアパスポート等を活用しながら、系統的・継続的な取組が必要である。	B	・児童生徒にとっては、自らの将来の夢について現実的に考えるには少し早いかもしれないが、それぞれの発達段階に応じたキャリア教育の推進が必要と考えられる。	保健指導部
	●望ましい生活習慣の形成	○「早寝・早起き・朝ごはん」が身に付いている児童生徒90%以上。 ○挨拶、返事、履物そろえがいつでもできる児童生徒90%以上。	・PTAと連携しながら家庭への啓発をすすめる。 ・食育だよりの発行。	B	・「早寝・早起き・朝ごはん」の達成度は73%、「挨拶、返事、履物そろえ」の達成度は86%である。PTAと連携しながら家庭への啓発を図ったり、食育だよりを発行するなどして対策を進めていく。	B	・「早寝・早起き・朝ごはん」の達成度は73%、「挨拶、返事、履物そろえ」の達成度は87%である。 ・望ましい生活習慣の形成に向けてPTAと連携・継続した啓発が必要である。	B	・PTAと連携し、家庭でのスマホやタブレット利用についての共通理解を図ることや、家庭で朝食をしっかりと摂らせることなどの啓発を行うことが必要と考えられる。	
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	○健康や体の育成	○体力向上に意欲的に取り組む児童・生徒90%以上。	・1年～6年での中央オンラインスポーツチャレンジへの参加促進。 ・7年～8年での外部人材(部活動指導員等)を活用した運動部活動の推進。	A	・達成度は93%であり、数値目標を達成している。	A	・達成度は96%であり数値目標を達成している。 ・感染症予防の観点により、中央オンラインスポーツチャレンジの実施が参加が難しかった。	A	・スポーツピアや地域人材を活用しながら、持続可能な学校部活動の運営が必要と考えられる。	
	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。	・定時退勤日の設定。 ・部活動休養日の設定。 ・学校開庁日の設定。 ・電話対応時間帯の設定。	B	・時間外の上限を越えない教員の割合は76%である。引き続き、教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の遵守に向けて、業務効率化に取り組む。	B	・時間外の上限を越えない教員の割合は72%である。引き続き、全員のあり方、仕事の詰め方などに対する認識を向上させ、協働による取組を推進する必要がある。	B	・今後も時間外在校時間の縮減に努め、児童生徒にとって適切な職業となれるように、生き生きと子どもたちに関わってほしいと考える。	管理職
●自分磨きのための時間確保	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	○自分磨きのための時間確保	○仕事と生きがい(趣味、子育て等)を両立させている職員80%以上。	B	・公立学校共済組合の厚生サービス等、福利厚生制度の積極的な活用について職員会議等を用い周知する。	B	・達成度は73%である。今後も、福利厚生制度の積極的な活用について周知を促したり、定時退庁推進日を徹底する。	B	・児童生徒に指導するためには、まず、教師自身が自分の生活を充実させる、豊かなものにする必要があると考える。	
	●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。	B	・時間外の上限を越えない教員の割合は76%である。引き続き、教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の遵守に向けて、業務効率化に取り組む。	B	・時間外の上限を越えない教員の割合は72%である。引き続き、全員のあり方、仕事の詰め方などに対する認識を向上させ、協働による取組を推進する必要がある。	B	・児童生徒に指導するためには、まず、教師自身が自分の生活を充実させる、豊かなものにする必要があると考える。	
(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目			具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	重点取組 取組内容	成果指標 (数値目標)		進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言	
○特別支援教育の充実	○教師の専門性と意識の向上	○インクルーシブ教育への認識が高まったと答える教師80%以上。	・特別支援教育ガイドラインを活用する。 ・リレーションシートを用いた月一回の情報共有や長期休業中の研修を行う。	A	・達成度は86%であり、数値目標を達成している。 ・取組が進んでいない学年において、リレーションシートを活用を促し、更に情報共有を図る。	A	・達成度は90%であり、数値目標を達成している。 ・全職員と連携し、リレーションシートの活用、児童生徒を含めたインクルーシブ教育への意識向上を継続する必要がある。	A	・保護者、教師共に、特別支援教育に対する高い認識があり、今後も、学校において発達特性を認め合う雰囲気づくりを継続してほしいと考える。	生徒指導部
○家庭・地域との連携	○義務教育学校・コミュニティスクールとして児童・生徒の人的自立を実現	○学校・家庭・地域が三位一体となって児童・生徒を育てていると感じる教職員・保護者90%以上。	・コミュニティスクール新聞(仮題)を定期的に発行し、学校・家庭・地域相互の理解促進や活動への啓発を行う。 ・地域の関係団体と連携を密にし、連携を強化したり、人材バンクの整理を行う。	B	・達成度は79%であり、数値目標をほぼ達成している。教育活動の中で地域との連携は行われており、学校・家庭・地域相互の理解促進や活動への啓発を続ける。	A	・教職員、保護者、それぞれから見た達成度は79%、82%であり、ほぼ数値目標を達成している。 ・今後は、感染症対策を徹底しながらも、学校や地域のニーズに合わせた取組を協働して行っていくと共に学校運営に対するの熟識を推進する必要がある。	A	・学校や地域のニーズに合った、協働した取組を今後も継続させていく必要がある。 ・児童生徒には、コミュニティスクールを通して、ふるさと多久のよさを感じて成長、自立していくしてほしいと考える。	研修部
●...県共通 ○...学校独自 ◎...志を高める教育										
5 総合評価・次年度への展望	・教師の授業力は確実に向上している。この成果が、全国及び佐賀県学習状況調査の結果に数値として表れるよう、次年度も引き続き児童生徒の学力向上を図ることを重点目標としていきたい。									